



2021年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所が取りまとめた結果 —

今後の見通し(2022年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、「屋久島南付近での変動」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州(山口県・沖縄県を含む)沿岸域にかけての表層水温は、全般的に「**平年並み～やや高め**」で経過する。

※引用符「」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「**やや**」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「**平年並み**」 : 約2年に1回程度の発生頻度

漁況(来遊水準)

- (1) マアジ: 東シナ海は沖合域で前年・平年並み、沿岸域で前年・平年を上回る。
日本海は前年並みで、平年を下回る。
- (2) マサバ: 東シナ海は沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。日本海は前年並みで、平年を下回る。
- (3) ゴマサバ: 東シナ海は沖合域で前年・平年並み、沿岸域で前年並みで、平年を下回る。
- (4) マイワシ: 東シナ海は前年・平年を下回る。日本海は前年・平年を上回る。
- (5) ウルメイワシ: 東シナ海は前年・平年並み。
- (6) カタクチイワシ: 東シナ海は前年・平年を下回る。

※「前年」は2021年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。

※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ。

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当: 企画調整部門(横浜) 森永

漁況: 浮魚資源部(長崎) 大下、黒田

海況: 海洋環境部(長崎) 渡邊、種子田、井桁

電話: 095-860-1600(長崎)、ファックス: 095-850-7677(長崎)

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

予報対象海域

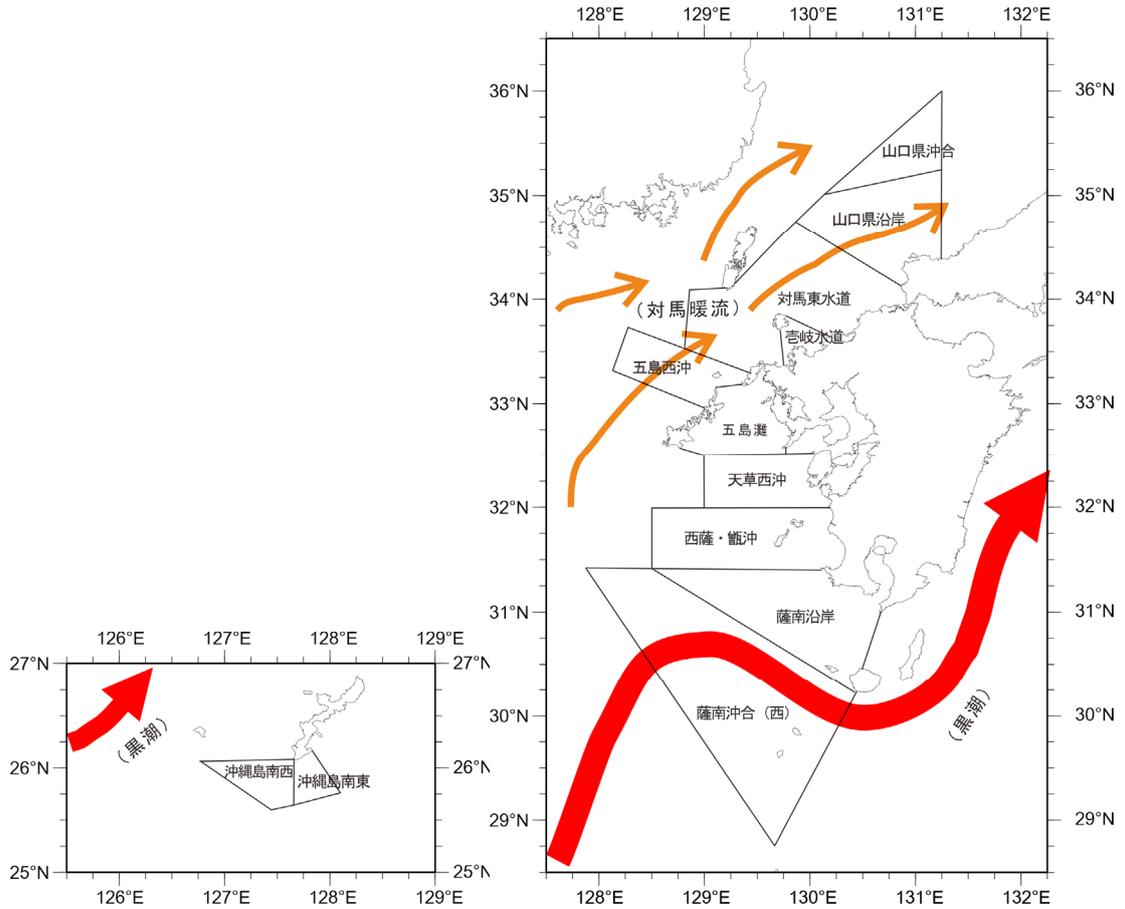


図1. 海況（沿岸）

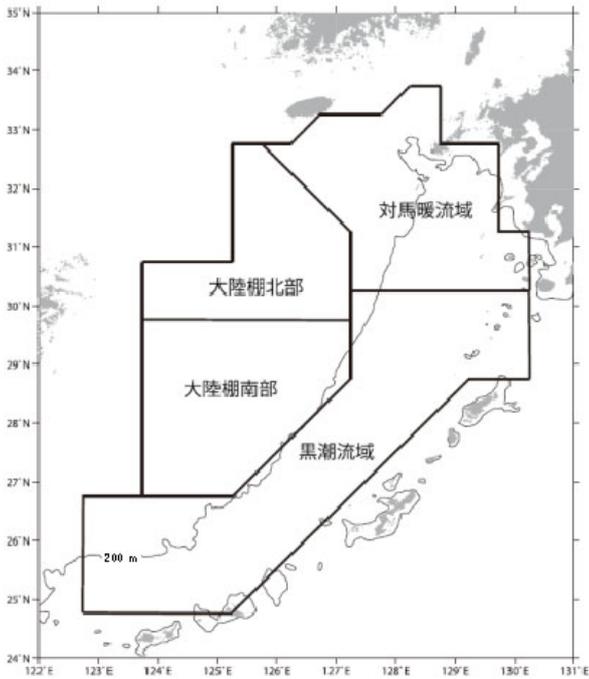


図2. 海況（沖合）

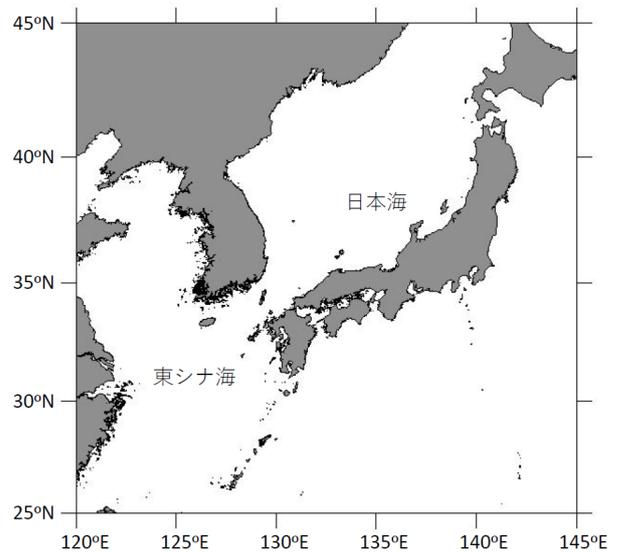


図3. 漁況。東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域。日本海：島根県から青森県までの沿岸とその沖合を含む海域（陸奥湾を含む）

西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2022年4月～9月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返すが、「屋久島南付近での変動」もしくは「接岸傾向」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚上、黒潮流域は「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2021年10月～2022年3月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10月「はなはだ高め」、11月「やや低め」、12月～2月「平年並み」。

南部：10月「はなはだ高め」、11月～2月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10月～1月は「接岸傾向」、2月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」で経過。

(2) 海面水温

10月「かなり高め」、11月「平年並み」、12月「やや高め」、1・2月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：10月「かなり高め」、11月「はなはだ高め」、12月「やや高め」、1・2月「平年並み」、3月「やや高め」。

山口県沿岸：10・11月「かなり高め」、12月「平年並み」、1・2月「やや低め」、3月「平年並み」。

対馬東水道：10月「かなり高め」、11月「はなはだ高め」、12月「やや低め」、1・2月「平年並み」、3月「やや低め」。

壱岐水道：10・11月「かなり高め」、12・3月「平年並み」。

五島西沖：11・3月「平年並み」。

五島灘：11・2月「やや高め」、3月「平年並み」。

天草西沖：10・11月「やや高め」、1・3月「平年並み」。

西薩・甑沖：11・1月「平年並み」、3月「やや高め」。

薩南沿岸：11月「やや高め」、1月「やや低め」、3月「平年並み」。

薩南沖合：11月「やや高め」、1・3月「平年並み」。

沖縄島南東：10・11月「やや高め」、3月「平年並み」。

沖縄島南西：10・11月「やや高め」、3月「平年並み」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10・11月「平年並み」、12月「やや高め」、1月～3月「平年並み」。

山口県沿岸：10・11月「平年並み」、12月「やや高め」、1月～3月「平年並み」。

対馬東水道：10月～12月「平年並み」、1月～3月「やや低め」。

壱岐水道：10・11月「やや低め」、12・3月「平年並み」。

五島西沖：11・3月「平年並み」。

五島灘：11・2・3月「平年並み」。

天草西沖：10月「かなり低め」、11月「やや低め」、1月「平年並み」、3月「やや低め」。

西薩・甑沖：11月「やや低め」、1月「平年並み」、3月「やや低め」。

薩南沿岸：11月「平年並み」、1月「やや低め」、3月「平年並み」。

薩南沖合：11月「平年並み」、1月「かなり低め」、3月「平年並み」。

沖縄島南東：10・11月「平年並み」、3月「かなり低め」。

沖縄島南西：10・11月「平年並み」、3月「かなり低め」。

3. 現況（2022年3月中旬）

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「平年並み」、南部「やや高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。

海面水温は「平年並み」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「かなり高め」。

(注) 引用符「」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」：約22年に1回程度の発生頻度

「かなり」：約7年に1回程度の発生頻度

「やや」：約3年に1回程度の発生頻度

「平年並み」：約2年に1回程度の発生頻度

マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域は前年・平年並み、沿岸域は前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、対馬沖、東シナ海中・南部、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの1歳魚（ゼンゴ・小・中銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部が漁場となる。

(3) 魚体：15～22cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と22cm以上の2歳魚以上（小・中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2021年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2021年11月～2022年1月）および見通し（2022年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980・1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年から2012年にかけてゆるやかに減少し、2012年は34万トンだった。2013年～2019年は35万～40万トンで推移し、2020年は44万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジ漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回った。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2021年11月～2022年2月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は6千トンで前年（2020年11月～2021年2月、5千トン）を上回り、平年（7千トン）並みであった。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表1）。漁獲の主体は17～25cmの1歳魚（2020年級群）と17cm以下の0歳魚（2021年級群）であった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表2）。漁獲の主体は17～22cm

の1歳魚（2020年級群）、17cm以下の0歳魚（2021年級群）であった。

3. 今後の見通し

直近の漁況より、2020年級群の豊度は2019年級群並みで、2021年級群の豊度は2020年級群並みとみられる。2022年級群の豊度の評価は難しいが、海洋環境等から判断すると2021年級群並みから下回るとみられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期には1歳魚（ゼンゴ銘柄）と2歳魚（小・中銘柄）が漁獲の主体で、3歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。前年の漁況は平年並みだった。漁獲の主体となる1歳魚と2歳魚の豊度は前年並みとみられることから、沖合域の来遊量は前年・平年並みと考えられる。また、沿岸域では、直近の漁況から判断すると、1歳魚を主体に前年を上回る来遊があるとみられる。このため、沿岸域の来遊量は前年・平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期には1歳魚（ゼンゴ銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。前年の漁況は平年を下回った。漁獲の主体となる1歳魚の豊度は前年並みで、0歳魚の年級豊度は前年並み～下回るとみられることから、来遊量は低調だった前年並みで平年を下回ると考えられる。

マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、五島西、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33～35cmの2歳魚（小銘柄）が、漁期後半はさらに25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33cm以上の2歳魚以上（小・中銘柄）が、漁期後半はさらに25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2021年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2021年11月～2022年1月）および見通し（2022年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に60万～70万トン台に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、50万トン前後に留まっている。2013年には1973年以降で過去最低の38万トンとなったが、2014年以降、高い加入量に支えられ、資源量は60万トン前後まで増加した。しかし、2019年以降、加入量が減少し、2020年の資源量は36万トンと推定されている。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2018年は15万トンと多かったが、2019年は10万トン、2020年は8万トンと少なかった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2021年11月～2022年2月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2万3千トンで前年（1万7千トン）を上回り、平年（2万3千トン）並みであった。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年を上回り、平年並みであった。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年並みであった（表1）。漁獲の主体は18～27cmの0歳魚（2021年級群）と28～34cmの1・2歳魚（2019・2020年級群）であった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表2）。漁獲の主体は20～27cmの0歳魚（2021年級群）と28cm以上の1歳魚（2020年級群）以上であった。

3. 今後の見通し

2020年までの情報に基づく今年度の資源評価結果から判断すると、2020年級群の豊度は低いとみられるが、東シナ海における2021年以降の安定した漁況も加味すれば、2020年級群の豊度は2019年級群並みか下回るとみられる。2020年秋以降の漁況から判断すると、2021年級群の豊度は2020年級群並みとみられる。2022年級群の評価は現段階では難しいが、資源評価における将来予測結果から判断すると、2021年級群並みとみられる。0～2歳魚が漁獲の主体であることから、系群全体の豊度は前年並みと考えられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないため、漁獲は低調に推移すると考えられる。前年の漁況は前年並みであった。沖合域、沿岸域とも、前半は1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度がそれぞれ前年並みとみられることや2021年秋以降の安定した漁況から判断して、沖合域、沿岸域とも来遊量は前年・前年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないため、漁獲は低調に推移すると考えられる。前年の漁況は前年を下回った。沖合域、沿岸域とも、前半は1歳魚以上（豆～中銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる0歳魚と1歳魚の年級豊度がそれぞれ前年並みであるものの、2021年春以降の低調な漁況から判断して、来遊量は前年並みで、前年を下回ると考えられる。

ゴマサバ東シナ海系群の漁況予報

今後の見通し（2022年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）、3歳魚（2019年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

(1) 来遊量：沖合域は前年・平年並み、沿岸域は前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、対馬沖、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では15～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では28～37cmの1歳魚以上（小～中銘柄）が漁獲される。

注：「前年」は2021年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2021年11月～2022年1月）および見通し（2022年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、10万～20万トン程度で推移し比較的安定していた。近年は、2015年以降増加傾向を示し、2018年には20万トンに達したが、2019年に急減し、2020年は9万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降5万トン前後で推移している。近年では2011年の4万9千トンピークに減少傾向にあり、2018年にやや増加したものの、2019年以降減少し、2020年は1973年以降で過去最低の1万8千トンであった。

2. 漁況の経過

2021年11月～2022年2月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、東シナ海中部と五島灘・薩南、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2万3千トンで、前年（1万7千トン）を上回り、平年（2万3千トン）並みであった。九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年を上回り、平年並みであった。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表1）。20～35cmの0歳魚（2021年級群）以上が漁獲された。

3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2020年級群の豊度は2019年級群並み、2021年級群の豊度は2020年級群並みとみられる。2022年級群の評価は現段階では難しいが、資源評価における2021年の親魚量は微増と予測されるため、2021年級群並みと見積もるのが妥当であろう。

例年、4月～9月期は沖合域では1・2歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。前年の漁況は平年を下回った。漁獲量の大半を占める1歳魚の年級豊度が前年並みであり、直近の漁況も悪くないことから、沖合域の来遊量は前年・平年並みと考えられる。沿岸域では1歳魚以上（小～中銘柄）が主に漁獲される。沿岸域の来遊量は、過去の知見から資源量の変動傾向に準ずると考えられており、直近の漁況も考慮すると、前年並みで、平年を下回ると考えられる。

マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）、3歳魚（2019年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は主に15～19cmの1歳魚に2歳以上が混ざり（中・大羽銘柄）、後半は15cm以下の0歳魚（小・中羽銘柄）が主体となる。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年・平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部～中部、後半に日本海西部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は16～22cmの1～3歳魚（小・中・大羽銘柄）主体に、後半は5～12cmの0歳魚（小・中羽銘柄）が漁獲される。

注：「前年」は2021年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2021年11月～2022年1月）および見通し（2022年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じた。

東シナ海・日本海における我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年までは100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2011年に急激に増加して4万3千トンとなった。その後も増加傾向にあり、2020年は7万3千トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2021年11月～2022年1月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年・平年を下回った（表1）。海域別に見ると、例年漁獲の主体となる長崎県以南の沿岸域において僅かな漁獲しかなく、全ての海域において前年・平年を下回った。漁獲の主体は14～17cmの0歳魚（2021年級群）であった。

(2) 日本海

2021年11月～2022年1月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年を上回り、平年を下回った（表2）。海域別に見ると、日本海西部では前年を上回ったが、日本海北部では能登半島周辺で前年を下回り、青森県で前年を上回った。日本海西部における漁獲の主体は10～16cmの0歳魚（2021年級群）であった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2020年級群の豊度は2019年級群よりも大きく、2021年級群の豊度は2020年

級群より小さいとみられる。2022年級群の評価は難しいが、親魚の来遊状況と考えられる直近の漁況から判断すると、東シナ海における2022年級群の豊度は2021年級群より小さく、日本海における2022年級群の豊度は2021年級群より大きいとみられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。前年の漁況は平年をやや下回った。4月～9月期の漁況は、漁期後半における0歳魚の漁獲量に強く影響される傾向がある。東シナ海における0歳魚の豊度は低いと考えられるため、東シナ海の来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。ただし、前半の親魚の来遊量が多ければ0歳魚の豊度も高まり、期間を通じた来遊量が増える可能性がある。

(2) 日本海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。前年の漁況は平年を上回った。4月～9月期の漁況は、漁期前半における1歳魚以上の漁獲量に強く影響される傾向がある。年級群豊度を考慮すると、漁期前半における来遊量を構成する1・2歳魚（2021・2020年級群）の豊度は前年同期の1・2歳魚（2020・2019年級群）を上回ると考えられることから、日本海における来遊量は前年・平年を上回ると考えられる。ただし、漁獲規制等により、漁獲量としては前年並みにとどまる可能性がある。

ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）、2歳魚（2020年級群）。
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：漁期の後半が漁獲の主体となる。長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15cm以上の1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2021年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2021年11月～2022年1月）および見通し（2022年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は1976年から1984年にかけて減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1995年には資源量は10万トンを超えたが、その後再び減少し、2003年に2万5千トンとなった。2003年以降は変動しながら増加し、2015年には14万3千トンに達したが、その後、減少して2020年の資源量は4万9千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国の漁獲量は、1976年から1998年まで毎年2万トンを超える漁獲があった。特に1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年にかけて1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向にあり、2013年と2016年には5万トンを超える漁獲量となった。その後漁獲量は減少し、2017年以降は3万1千～3万9千トンの間で変動したが、2020年は2万トンと大きく減少した。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を上回り、平年を下回った（表1）。2021年11月～2022年1月までの漁獲の主体は15～20cmの0歳魚（2021年級群）を主体に20cm以上の1・2歳魚（2020・2019年級群）も漁獲された。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期には1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半に0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となる。2021年11月～2022年1月の漁況の経過から、2021年級群の豊度は2020年級群並みと考えられる。2022年級群の豊度を現時点で予測するのは困難であるが、産卵量調査等から判断すると、2022年級群の豊度は2021年級群と同程度と考えられる。したがって、全体の来遊量は前年・平年並みと考えられる。

カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2022年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2022年級群（2022年生まれ））、1歳魚（2021年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、山口県および長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：5～10cmの0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体で、10cm以上の1歳魚（大羽銘柄）が混じる。

注：「前年」は2021年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2021年11月～2022年1月）および見通し（2022年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1995年以降増加傾向を示して1998年には42万6千トンに達したが、2001年～2005年には19万トン前後まで減少した。資源量は2007年には30万2千トンとなったが、その後減少し、2020年には12万7千トンとなった。

東シナ海・日本海における我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年・2015年に増加して6万1千トンを記録した。2016年以降は減少傾向にあり、2020年には4万6千トンとなった。

2. 漁況の経過

鹿児島県～山口県地先における漁獲量は不漁であった前年を下回り、平年を下回った（表1）。漁獲の主体は2021年11月には5cm未満の0歳魚で、2021年12月～2022年1月には8cm未満の0歳魚であった。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期の前半は1歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（カエリ・小羽・中羽銘柄）が主体に1歳魚も混じって漁獲される。2021年5月～9月の漁況等から、2021年の春期発生群の豊度は2020年の春期発生群を下回ると考えられる。また2021年10月～2022年1月の漁況等から、2021年の秋期発生群の豊度は2020年の秋期発生群を下回ると考えられるため、1歳魚の豊度は前年を下回ると判断される。2022年の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、2021年の春季発生群並みであると仮定すれば、全体の来遊量は前年・平年を下回ると考えられる。

表1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2021年11月～2022年1月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	漁獲量は969トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比86%、平年比126%）。	枕崎漁港のまき網による漁獲量は176トンで、前年・平年を下回った（前年比15%、平年比25%）。	枕崎漁港のまき網による漁獲量は1,206トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比93%、平年比64%）。
熊本 牛深港	漁獲量は66トンで、前年・平年並みであった（前年比101%、平年比108%）。	漁獲量は344トンで、前年・平年を下回った（前年比64%、平年比75%）。	
長崎	地域により差があるが、前年並みで、平年を上回った（前年比94%、平年比120%）。	地域により差があるが、前年・平年並みであった（前年比109%、平年比96%）。	
佐賀	漁獲量は163トンで、前年・平年を上回った（前年比368%、平年比147%）。	漁獲量は59トンで、前年・平年を上回った（前年比434%、平年比220%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は29トンで、前年・平年を下回った（前年比34%、平年比41%）。漁獲のうち、小銘柄が66%、中銘柄が29%であった。棒受網での漁獲はなかった。小型定置網の漁獲量は7トンで、前年を上回ったが、平年を下回った（前年比147%、平年比76%）。	代表港中型まき網漁獲量は39トンで、前年・平年並みであった（前年比109%、平年比109%）。漁獲のほとんどを豆銘柄が占めた。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は2トンで、前年・平年を下回った（前年比2%、平年比6%）。
山口	中型まき網による漁獲量は98トンで、前年・平年を下回った（前年比49%、平年比42%）。	中型まき網による漁獲量は317トンで、前年・平年を上回った（前年比838%、平年比205%）。	

注：「前年」は2021年11月～2022年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網による漁獲量は11トンで、前年・平年を下回った（前年比2%、平年比4%）。北薩海域の棒受網による漁獲量は4トンで、前年・平年を下回った（前年比5%、平年比26%）。	主要4港のまき網による漁獲量は602トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比123%、平年比51%）。北薩海域の棒受網による漁獲量は89トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比162%、平年比50%）。	主要4港のまき網による漁獲量は258トンで、前年・平年を上回った（前年比143%、平年比187%）。北薩海域の棒受網による漁獲量は22トンで、前年・平年を下回った（前年比47%、平年比56%）。
熊本 牛深港	漁獲量は22トンで、前年・平年を下回った（前年比18%、平年比28%）。	漁獲量は907トンで、前年・平年を上回った（前年比1,213%、平年比185%）。	漁獲量は167トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比256%、平年比79%）。
長崎	地域により差があるが、前年・平年を下回った（前年比0.06%、平年比0.08%）。	地域により差があるが、前年・平年を下回った（前年比54%、平年比20%）。	地域により差があるが、前年・平年を下回った（前年比25%、平年比22%）。
佐賀	漁獲量は約0.8トンで、前年・平年を下回った（前年比11%、平年比43%）。	漁獲量は8トンで、漁獲がなかった前年を上回り、平年も上回った（平年比723%）。	漁獲量は0.5トンで、前年・平年を下回った（前年比2%、平年比2%）。
福岡	代表港中型まき網および棒受網による漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は27トンで、前年・平年を上回った（前年比2,416%、平年比1,563%）。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。棒受網漁獲量は22トンで、前年・平年並みであった（前年比87%、平年比91%）。
山口	中型まき網漁業、棒受網・すくい網漁業における漁獲はほとんどなかった。	湊地区の棒受網・すくい網漁業における漁獲はなかった。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の漁獲量は小羽・中羽主体に19トンで、前年・平年を下回った（前年比12%、平年比7%）。

注：「前年」は2021年11月～2022年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

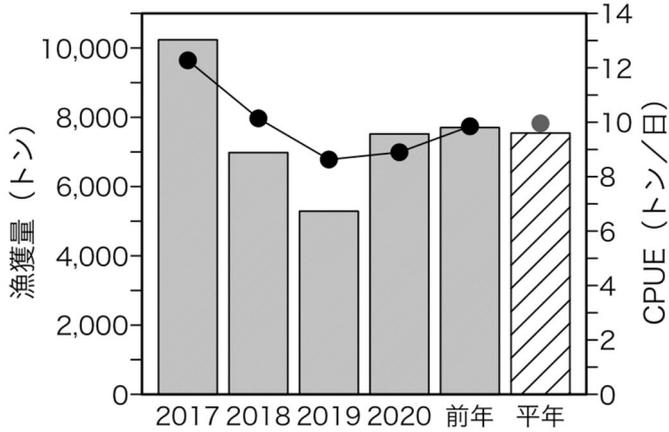
表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2021年11月～2022年1月）

	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は106トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比87%、平年比32%）。	漁獲量は246トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比316%、平年比53%）。	漁獲は僅かで、前年・平年を下回った（前年比0.2%、平年比1.1%）。
鳥取	漁獲量は1,999トンで、前年・平年並みであった（前年比103%、平年比100%）。	漁獲量は3,383トンで、前年・平年を下回った（前年比63%、平年比48%）。	漁獲量は452トンで、前年を上回ったが、平年を下回った（前年比315%、平年比43%）。
兵庫	漁獲量は40トンで、前年・平年を上回った（前年比283%、平年比149%）。	漁獲量は4トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比112%、平年比299%）。	漁獲量は4トンで、前年・平年を上回った（前年比856%、平年比1,476%）。
京都	漁獲量は110トンで、前年・平年並みであった（前年比118%、平年比91%）。	漁獲量は52トンで、前年・平年を上回った（前年比146%、平年比158%）。	漁獲量は6トンで、前年・平年を上回った（前年比2,026%、平年比2,047%）。
福井	漁獲量は57トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比79%、平年比84%）。	漁獲量は59トンで、前年・平年を上回った（前年比378%、平年比368%）。	漁獲量は11トンで、漁獲のなかった前年を上回り、平年も上回った（平年比3,834%）。
石川	漁獲量は397トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比126%、平年比113%）。	漁獲量は453トンで前年・平年を下回った（前年比64%、平年比58%）。	漁獲量は7トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比40%、平年比93%）。
富山	漁獲量は372トンで、前年・平年を上回った（前年比191%、平年比125%）。	漁獲量は233トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比115%、平年比60%）。	漁獲量は1トンで、前年・平年を下回った（前年比9%、平年比25%）。
新潟	漁獲量は220トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比139%、平年比105%）。	漁獲量は399トンで前年・平年を下回った（前年比58%、平年比49%）。	漁獲量は1トンで、漁獲のなかった前年を上回り、平年も上回った（平年比123%）。
山形	漁獲量は25トンで、前年・平年を上回った（前年比249%、平年比264%）。	漁獲量は1トンで、前年・平年を下回った（前年比39%、平年比28%）。	漁獲はなかった。
秋田	漁獲量は70トンで、前年・平年を上回った（前年比191%、平年比221%）。	漁獲量は6トンで前年並みで、平年を下回った（前年比93%、平年比78%）。	漁獲量は2トンで、漁獲のなかった前年を上回り、平年も上回った（平年比249%）。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は72トンで、前年・平年並みであった（前年比96%、平年比90%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は192トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比115%、平年比167%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は261トンで、前年を上回り・平年並みであった（前年比152%、平年比118%）。

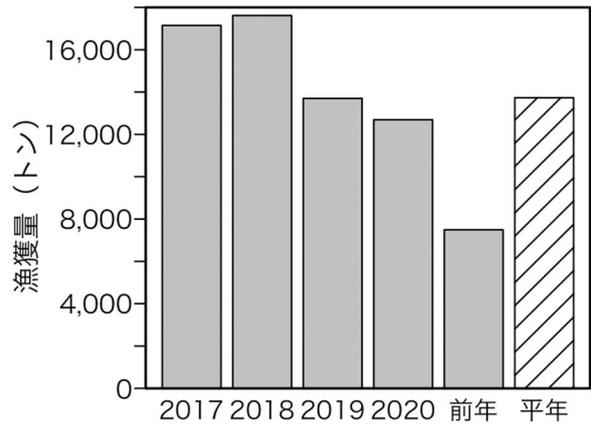
注：「前年」は2021年11月～2022年1月、「平年」は過去5年の平均値。

日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

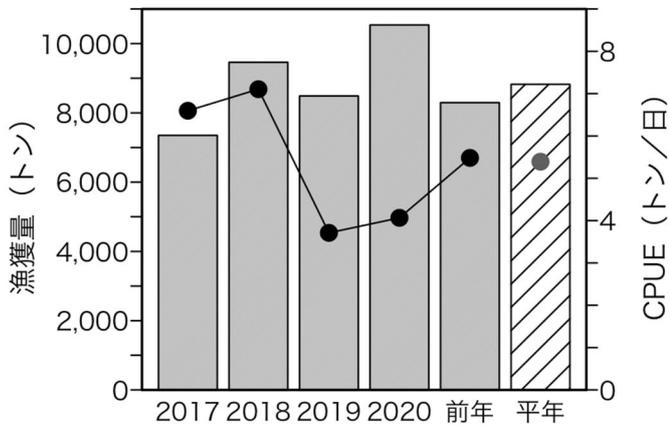
マアジ (東シナ海)



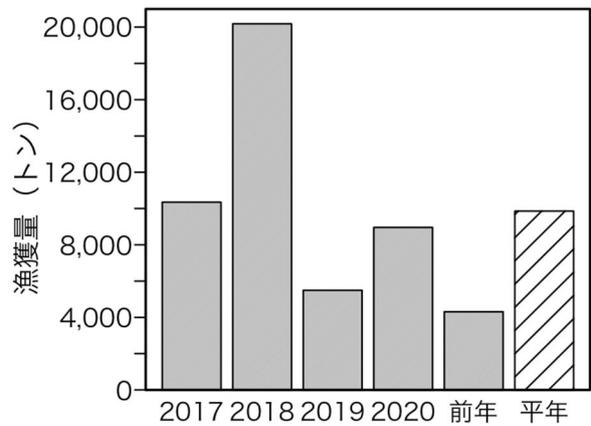
マアジ (日本海)



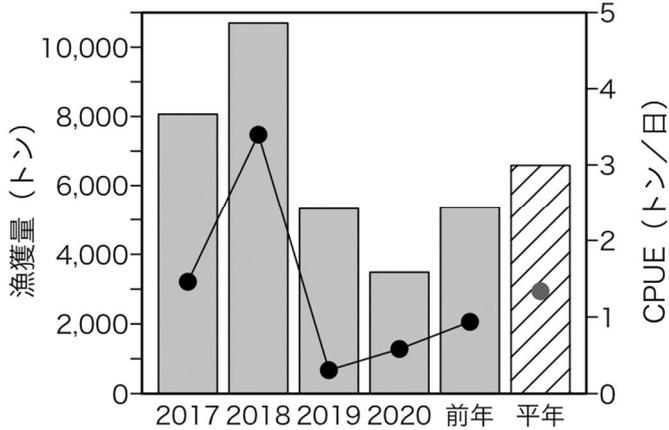
マサバ (東シナ海)



マサバ (日本海)

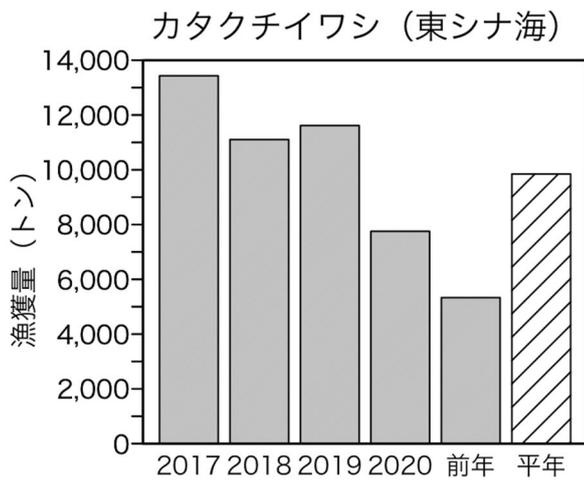
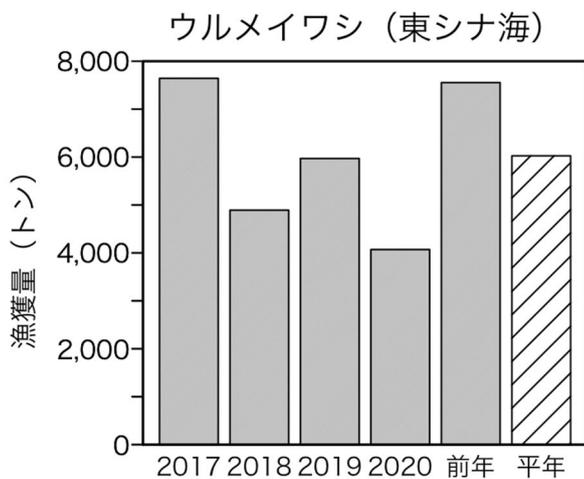
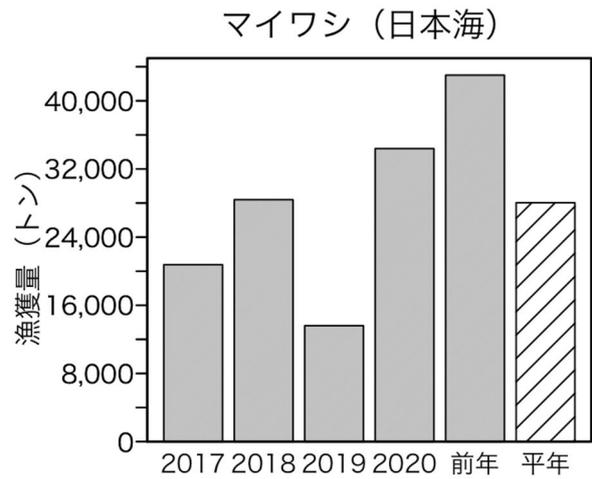
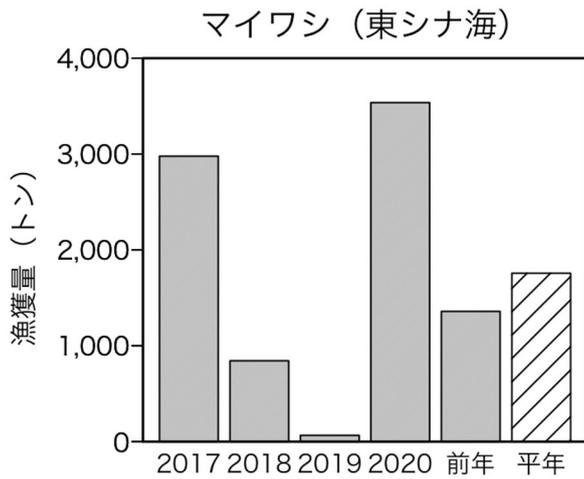


ゴマサバ (東シナ海)



今後の見通し参考図 (マアジ、さば類)

沿岸漁業の漁獲量 (沿岸漁況の指標の一つ; 棒グラフ) と大中型まき網漁業の1日当たりの漁獲量 (沖合漁況の指標の一つ; 折れ線グラフ、CPUE)。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県 (枕崎港・阿久根港) のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量 (ゴマサバを含むが主にマサバ) の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県 (枕崎港・阿久根港) のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業 (大中型まき網漁業を含む) の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。



今後の見通し参考図 (いわし類)

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業（大中型まき網漁業を含む）の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産研究所	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	福岡県水産海洋技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	佐賀県玄海水産振興センター
石川県水産総合センター	長崎県総合水産試験場
福井県水産試験場	熊本県水産研究センター
京都府農林水産技術センター 海洋センター	鹿児島県水産技術開発センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
	(取りまとめ機関)
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所